
パープルレイン

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

パープルレイン

【Nコード】

N8024A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何となくけだるい日常を送るOL真砂子。だがふと道で見掛けた少年に心を奪われけだるい日々をうきうきとしたものに変えていく。しかしそれはうたかたの夢に過ぎなかった。大人の女の人のほんの一時少女の頃に戻ったかのような恋愛を書いてみました。

第一章

パープル

レイン

その日は朝から雨だった。そして夜になっても続いていた。

「嫌になるわね」

ビルから出て来た一人の女性が顔を顰めて言う。

「仕方ないじゃない」

その横のスーツの男がそれに応える。

「梅雨なんだし」

「それを言ったらおしまいだけれどね」

女はバッグから赤い折り畳み傘を出しながらそれに応じた。そして傘を組み立てる。

「朝も夜も。本当に雨ばかりだと」

「洗濯物が乾かないとか？」

「おあいにくさま。うちには乾燥機って便利なものがあるのよ」

「これはまた」

スーツの男はそれを聞いて軽い調子で返す。

「便利なものをお持ちで」

「今じゃ常識よ」

傘を組み立て終わってこう述べる。

「乾燥機つきの洗濯機なんてね。結構値が張るけれど」

「お金をかけているのはスーツだけじゃなかったんだ」

男はそう言いながら女のスーツを見た。ぴっしりとしたクリーム色の上着に同じ色の膝までのタイトスカートである。ガードの固そうな外見であるが物腰はそうではなかった。

「女は一つのことだけにだけお金をかけるわけにはいかないのよ」

男を見上げてこう言う。その顔はやや鼻が高く、癖のある鉤の他は整っていると言ってよいものであった。形よくカーブしている眉

とアーモンドを少し細くした様な目に黒くソバージュにした長い髪。胸は小さいがプロポーシヨンも全体的によかった。背は高く、スーツの男と比べてもひけを取らない程であった。

「何かとね。大変なのよ」

「あまり説得力のある言葉には聞こえないけれどね」

男の方は背は高く、すらりとしているが顔自体はわりかし平凡な顔であった。可もなく、不可もなく。特徴のない顔と言ってしまえばそれまでか。人によってはいいと言われるだろうが人によってはまあそうかな、で済む顔である。今隣にいるスーツの女性と比べるとやはり見劣りしてしまう。

「我が社きつての才媛平井真砂子女史の御言葉とは思えませんね」

「何か言ったかしら、我が社のホープ西村丈主任」

「ホープなどとはとんでもない」

「三十になるかならないで主任になってホープじゃないって言わせないわよ」

真砂子は丈にこう返した。

「幾らうちが駆け出しのベンチャーだっていつてもね」

「そのベンチャーを支えているのが君じゃないかな」

「褒めたって何も出ないわよ」

「乾燥機を買ったから？」

「シヤネルの化粧品を買ったからよ。この前奮発してね」

「やっぱりお金をかけるのは一つじゃないんだ」

「そういうこと」

真砂子は目を閉じて頷いた。

「スーツにもヘアにも。美容にもお金をかけているんだから」

「女は大変だね」

「学生の時は違ってたけれどね。今はね」

少し残念そうな笑みになった。

「色々とお金をかけないと。何かと保てないものがあるのよ」

「花の命は結構長いとは聞くけれど？」

「その花もお水がないと枯れてしまつてしょ」
真砂子はこう返した。

「長くてもね、栄養がなければ駄目なのよ」

「栄養なしじゃもう駄目になつたつてこと？」

「意地悪なこと言つわね」

「おやおや」

「若い子が羨ましいわよ」

そしてふとこつ溜息混じりに言つた。

「手入れとか気にしないでいられるんだから」

「もう一度なりたい？」

「なれたらね」

出来る筈もないことではあるが。

「若返れたらいいのだけれど」

「その為にすることは？」

「恋なんて野暮なことは言わないでよ」

「おっと、じゃあ言うことがなくなつてしまつたな」

「雨が降つてるのに。寒くなるわ」

「涼しくなつていいじゃないか」

「そう。だつたら傘はいらないわね」

そう言つて丈の傘を取り上げた。

「おい、何するんだよ」

「涼しいのが好きなんでしょ？雨に濡れてみたら？」

「そんなことしたら風邪ひくじゃないか」

「そうしたら減らず口もなおるかもね」

「わかつたよ、謝るよ」

「本当に？」

「だから。傘を返してくれよ」

「どうしようかしら」

まるで学生のようにふざけ合つていた。気持ちはまだ若かつた。しかしそれも少しの間だけで真砂子はやはり歳がとつたのを感じずに

はいられなかった。一人になるとそれを実感する。

「はしゃいだ後が辛くなってきたわね」

苦笑いしながら夜道を進む。

「もう歳なのね、本当に」

そしてそれを実感せずにはいられなかった。

「ついこの前まで学生だったのに。月日が経つのも……つてこう思えるようになるから駄目なのね」

苦笑いが出た。出ずにはいられない。それに気付いてやはり疲れを感じる。

「あの頃は何もしなくてもよかったけれど」

その化粧や肌の手入れのことを思う。

「今はそうはいかないわね。難儀なことね」

そんなことを呟きながら雨の夜道を一人歩く。アスファルトに出来た水溜りが灯りを照らす。そして街の赤い光や青い光がそれに映ってさらに街を照らす。まるで下に鏡でもあり、それが光を反射させているかの様であった。

その道をハイヒールで歩く。道行く人々は擦れ違うだけの人であり誰なのか知らない。向こうもそれは同じだ。周りに人はいても彼女は今一人であった。

「家に帰ったら洗濯して」

さっき丈と話していたことをそのまま言う。

「あつ、その前にシャワーを浴びて」

順番を思い出した。いつも家に帰るとまずシャワーを浴びるのである。美容の為に朝起きてランニングをしてからもシャワーを浴びている。これも美容にいいと聞いたからである。冷水シャワーだ。ただし冬はしない。

「それからね。それから夕食」

これにも気を使っている。出来るだけ太らないようにしている。気にすることは多い。若い時は本当に何も気にしていなかったというのに。何か陰鬱な気持ちになろうとしていた。

「何か、こんなものばかりね」
そしてこう思った。

「あれは駄目、これならいいかも、それはやらなくちゃいけない。
歳をとるとこんなものばかり」

心の中で呟く。

「学生の頃はこんなことはなかったのに」

ここで後ろから声がしてきた。

「なあ、何食う?」

学生達であろうか。少年の声だった。

「コンビニでお握りでも買うか?」

「そんなのじゃ腹がふくれないよ。もっといいの買おうぜ」

「つつても今の時間何処も開いてねえよ」

「テストが長引いたからな」

「熟の帰りかしら」

真砂子は声を聞きながらそう思った。振り返りはしない。

「つたく、何であんなに長引くんだよ。テスト一枚で」

「仕方ないだろ、模試の前の事前のテストだったんだから」

彼等は不満を交えて言っていた。

「文句を言ってもはじまらないぜ」

「ちえっ」

「で、何食うんだよ」

また食べ物に話が戻った。

「コンビニが嫌ならファミレスでも行くか?」

「あっ、いいな」

その中の一人がそれに頷いたようである。

「じゃあカツ丼食おうぜ、カツ丼」

「カツ丼」

それを聞いた真砂子の顔色が変わった。

「こんな夜遅くにそんなカロリーの高いものを」

真砂子の考えの基準ではそうである。だが彼等は違うようである。

「ラーメンがいいんじゃないのか、パーコー麺な」

どうやらロイヤルホストに行くつもりようだ。豚カツを乗せた麺でありこのファミリーレストランの人気メニューである。実際に学生等に好評だ。

「いいな、それも」

「何なら両方頼むか？腹減ってるし」

「まあ行つてから決めようぜ」

そんな話をしながら真砂子の横を通り過ぎていく。この時真砂子はその中の一人の顔をちらりと見た。

「あつ」

その少年の顔を見て思わず声をあげた。今まで見たこともないような整った顔立ちの少年だったからだ。

見惚れてしまった。そして呆然となる。こんなことは久し振りであつた。

「何て綺麗な」

心の中で思った。そして後ろを振り返る。何処から来たのか見たいと思つたのだ。

ここはいつもの帰り道である。塾や予備校が多く並んでいる。その中の一つであるらしい。真砂子はあの少年はこの中の一つにいると思つた。だが何処にいるかまではわからなかった。

「何処なんだろう」

けれどここを通るのは間違いないのだ。それだけわかつただけでもよかつた。とりあえず明日もここを通る。また会えることを願うのであつた。そして雨の中を歩いて行つた。雨は弱まることなく降り続けている。道は相変わらず街の灯りを照らし返している。それまではその光を見ても何とも思わなかつたが今は何処か弾んだ気持ちになつていた。

そして次の日の帰りである。雨は降つてはいない。やはりその少年に会つた。後ろから声が聞こえてきたのだ。

「来たわね」

心の中で呟く。ちらりと後ろを振り返る。

そこにいた。茶色の髪で華奢な身体の少年が。中性的な外見で女の子にすら見える。そんな頼りなげなところが彼女の心をさらに刺激するのであった。

前に向き直る。あまり見ていては変に思われると思ったからだ。

そして彼が通り過ぎるのを待った。

「今日はコンビニでいいか」

また食べ物の話をしていた。

「軽くお握りでな」

「御前お握り好きだな」

「あれが一番食べ易いからな。美味しいし」

「じゃあ俺はサンドイッチにするか」

「メロンパンでもいいんじゃないか？」

「あれ牛乳がないと食べにくいからな」

「パン自体がそうだけれどな」

こうした何の気兼ねもなく食べられる若さがやはり羨ましかった。そしてそのままの美しさが。真砂子はそれに嫉妬めいたものを感じながらも少年が自分の横を通り過ぎるのを待っていた。

「通って」

またしても心の中で呟いた。自分の側を通り過ぎてくれることを祈った。

そして通った。あの少年が自分の真横を通った。

「やった」

これも心の中の言葉であった。自分の側を通ってくれた。そしてその横顔を間近で見られた。やはり若く、綺麗な顔であった。

「それじゃあ行くか」

「ああ」

だが彼はそれには気付かない。そのまま友達と話をしながら前に消えて行く。そしてそれっきりこの日は姿を見ることはなかった。だが真砂子はそれで満足だった。

それから真砂子は気分的にも乗り気になった。服にも化粧にも肌にも一層気を使うようになり仕事にも張りが出て来た。丈はそんな彼女を見てからかいの言葉をかけてきた。

「何かいいことでもあったのかい？」

「少しね」

仕事の合間に。真砂子はパソコンのデータを入力しながら丈に応えた。

「楽しみができたの」

「新しい香水を買ったとか？」

「そんなのじゃないわよ」

「じゃあスーツ」

「両方共いいのを揃えたけれどね」

それだけではないと言った。

「けれどそんなのじゃ楽しくはならないわよ」

「お金が出たからかい？」

「何か貴方ってお金の話が好きね」

「それがないと結局何もはじまらないからね」

彼は笑ってこう返した。

「お金がないのは命がないのと同じってね」

「夢がないわね」

「夢は確かに大事さ、けれどお金はそれと同じ位大事なんだよ」

「現実と理想をバランスよくとっていうつもり？」

「自分としてはね」

そのつもりなのであった。

「夢がない男って嫌われるからね」

「女には好かれないわね」

真砂子も笑みを浮かべてこう述べた。

「打算や計算だけの男なんてね。何の魅力もないわ」

「話がわかる」

「女ってのはねえ、見ているのよ」

そして言つ。

「男の魅力つてやつをね。外見だけじゃなくて」

「そうなんだ」

「顔とかそんなのは二の次なのよ。まずは魅力」

「魅力」

丈はここでネクタイを締めなおしてきた。まるで格好をつけるように。

「それよ。それがないと幾つになっても駄目。幾ら顔がよくても駄目」

「逆に言えばそれがあると幾ら若くても大丈夫と」

「ま、まあね」

ここで答える時何故か頬を赤くさせた。

「そこに顔が加われれば完璧、かしらね」

「さつき二の次つて言つたのに?」

「ステーキだけじゃ足りないでしょ」

これに対する真砂子の返事はこうであった。

「サラダもないと」

「贅沢なことだ」

「そういつことなのよ。容姿もあるとなおよし」

「あくまで添え物だと強弁すると」

「そう取ってもらつてもいいわよ。どうせ変わらないのだし」

「まあね。けれど平井女史はよく見ていらっしやる」

「何を?」

「男を。どうやらその御眼鏡に適う紳士が現われたようで」

「紳士つて呼べる程じゃないけれどね」

「応援してるよ」

「有り難うと言つて欲しいのかしら」

「お望みとあらば。人の恋路は邪魔しないよ」

「恋路とは限らないわよ」

「とぼけてるのかい?」

「さてね。それじゃあ仕事を再開して」

「楽しいお喋りはこの位にして」

「それじゃあね」

こうして彼等はまた仕事に戻った。真砂子は少年に会ってから心まで楽しくなっていた。仕事にも張りが出ていた。何をしても元気が出るようになっていたのだ。そしてそれは彼女の気にしている部分にも現われてきた。

「!?!」

また少年を見た。そして家に帰ってシャワーを浴びて浴室から出るとあることに気付いたのだ。

「お肌が」

そうであった。何故か顔や身体の肌の艶がよくなっているのだ。

「ハリも」

弾力も返っていた。水を弾いてすらいた。まるで学生の頃のように。

第二章

何となく理由はわかった。気が楽しいからだ。それが身体にも出ているのがわかった。全てはあの少年を見る楽しみからだ。

「胸も何だか」

今真砂子は素っ裸であった。タオルすら纏ってはいない。その大きな胸も最近垂れかけているのが気になっていたがそれが昔の様にあがっているのがわかった。それを見てさらに気分がよくなった。

「こんなことになるなんて」

鏡の自分の姿を見て笑みを作った。

「意外ね。けれどいいわ」

身体を拭いて部屋を出る。そして筆筒にしまつてあつた。下着を取り出す。

「楽しいから。それもあの子のおかげね」

そう思うとあの横顔が頭の中に浮かぶ。名前も知らない年下の子。一回りは離れているだろう。向こうは真砂子のことなぞ何も知らない。真砂子も彼の顔しか知らない。けれどそれでも真砂子はそれで満足していた。下着を着けた後は男もののカッターを着てそのままベッドに入る。これが彼女の部屋の中でのスタイルだった。そして洒落た今時の簡素な部屋の中で静かに眠りに入る。時計の目覚ましを確かめて。朝になればジャージに着替えて走る。いつもは義務的に走っている為けだるい。だが明日は気持ちよく走れると思つた。

毎日がさらに楽しくなってきた。食欲も出て来て、よく動くようになった。仕事もこれまで以上にこなし、評価もあがつた。今真砂子は全てが楽しくて仕方がなかった。

「何かさらに機嫌がよくなつたね」

「若返つたからかしら」

真砂子と丈は昼食を摂っていた。この日は休日出勤でファミリーレストランでの昼食であった。普段はコンビニで買ったサンドイッ

手等で済ませることも多いがこの日は少し奮発してここでの食事となったのである。

二人は窓側のテーブルに向かい合って座っていた。そして話をしていたのである。

「若返ったんだ」

「おかげさまでね」

真砂子は両肘をつき、手を重ねていた。その甲の上に顎を置いていた。そうした少し気取ったような姿勢で丈と話をしていた。

「生活に楽しみができたせいで」

「恋のおかげかな」

「恋かしら」

まだ彼女にはその実感はなかった。

「さてね。それは君が一番わかってるんじゃないかな」

「前も言っただかも知れないけれど恋とかそういう意識はないわ」

「そうなの」

「ただね。楽しみがあるだけ」

「それだけでそんなに変わるのかな」

「それが変わるのよ」

真砂子は答えた。

「人間ってのはね。そのうち貴方もわかるかもね」

「何ていうか思わせぶりな言葉だね」

「女の言葉と言って欲しいいわね」

「どうだか」

そんな話をしていると注文したメニューがやって来た。丈はナポリタン、そして真砂子はハンバーグセットだった。

「えらく大きなハンバーグだね」

「ええ」

真砂子が頼んだのは四〇〇グラムのハンバーグであったのだ。牛肉のものであり濃厚な肉汁がソースと絡み合っていた。

「食欲があつて」

「ダイエットにも気を使っていたんじゃないの？」

「それ以上にお腹がすくのよ。もう動けない位に」

「学生じゃあるまいし」

「そうね。学生の頃に戻った気分」

彼女は言った。

「何をしても。元気が有り余って仕方がないのよ」

「それもこれも生活に張りが出て来たからだね」

「そうね」

それを認めた。

「そこまで変わるんだったら何か知りたくなってきたな」

丈はナポリタンにチーズをかけながら言った。真砂子はハンバーグを切り、それを口に入れている。口の中に肉の旨味が広がる。ソースの濃厚な味と合わさり真砂子の口の中を支配した。

「一体それが何なのか」

「言う程のことじゃないわよ」

真砂子はその切ったハンバーグを口の中に入れ終えた後で答えた。

「些細なことだから」

「どうだか」

丈はその答えに対して冗談めかした声で返した。

「本当は凄いことなんじゃないの？」

「知りたいの？」

「否定はしないね」

そしてこう返した。

「一体どんな恋をしているのか」

「じゃあ言うわ」

真砂子は悪戯っぽく笑って応えた。

「プラトニッククラブよ」

「プラトニック」

「そうよ。ただ見ているだけ」

「それでそこまでなれるのかね」

「貴方はそんな恋はしたことないのね」

「こんな性格だからね」

軽い調子で言う。

「大人の恋は幾らでもあるけれど」

「若い恋はなし」

「その若い頃からね。幸か不幸か」

「まあどれがいいとは言えない話ね」

「そっちもそうなんじゃないの？」

丈は言った。

「そんな恋は」

「学生の頃はあつたわ」

彼女は言った。

「あの頃は若かったから」

「今は違うの？」

「あの頃に近付いていつてるかもね」

そう言うのにこりと笑った。

「少しずつ」

「それはいいことで」

そう言いながらスパゲティを口にする。

「けれどそれは思い違いだと思つよ」

「どうということかしら」

「近付いていつているのは少しじゃないと思つ」

丈は言った。

「かなりね。傍から見てもわかるよ」

「お世辞かしら」

「そうとつてもらつても別に構わないよ」

笑つてこう述べる。

「僕が思っているだけどね」

「まるで口説くみたいね」

「大人の女の人を口説くのは得意だけれどね」

ここで紅茶を飲んだ。アイスレモンティーである。

「けれど若い人は得意じゃないんだ」

「私が若いって？」

「気がね」

そしてこう答える。

「今の君は前と違うね。ハリがあるよ」

「あら、ハリは前からあるわよ」

「若さが加わったってことさ」

「若さがね」

「そのまま元気になっていったらいいさ。きっといいことがあるから」

「それじゃそうさせてもらおうわ」

「うん」

話は終わった。そして真砂子はふと前を見た。店のドアが開いたのに意識がいったからである。

そこから少年達が入って来る。休日だから遊びであろうか。その中の一人を見て彼女は思わず声をあげそうになった。

「どうしたの？」

真砂子の様子が変わったことに丈も気付いた。

「タレントさんでもやって来たの？」

「いえ、そんなのじゃないわ」

真砂子は平静を装ってこう返した。

「何でもないわ」

「そうなの」

「ええ。だから気にしないで」

「了解。これが終わったらすぐに会社に帰ろうか」

「ええ」

真砂子は外見は何とか冷静さを保っていたが内心は違っていた。心を驚かせて店に入って来た少年の中の一人を見ていた。それはいつも横を通り過ぎていくあの少年であった。

第三章

その少年は友人達と楽しく談笑しながらテーブルに着いた。そして食べながら談笑を続けていた。真砂子が見ていることには全く気付いていなかった。

「ねえ」

ここで丈が声をかけてきた。

「えっ、ええ」

真砂子もその声に顔を向けた。

「そろそろ時間だよ。急ごう」

「そうね」

真砂子はそれを受けてあたふたとハンバーグを食べはじめた。肉を切る手の動きもかなり速くなっている。

「仕事ももう少しだしね」

「そうね」

丈の言葉に食べながら応える。

「期待しているよ、そっちは」

「任せて」

応えはするが意識は仕事には向いていなかった。

ちらりと横目で店の中を見渡す。そこにあの少年が映っていた。

「代休ももらえるしね。元気よくいこうか」

「わかったわ」

彼女は大人の顔でそれに頷いた。顔は大人であったが今の彼女は心は少女の様になっていた。少年を見て胸の高まりを抑えられなくなってきた。

その日はそのまま仕事を終わらせた。真砂子はすぐに家に帰った。そしてシャワーを浴び、下着の上にカッターを羽織った格好でキッチン椅子に座っていた。その手には缶ビールがある。

「まさかあんなところで会うなんて」

正確には会ったとは言わないが彼女は会ったと認識していた。ピールのせいでほんのりと赤くなつた顔に愁いを微かに漂わせて呟いている。

「思いもしなかつたわ」

もう缶の中のビールはかなり減っていた。それを右手を揺らしながら物思いに耽っている。考えることはやはりあの少年のことであつた。

「いつもは夜に会っていたけれど。昼にも会うなんてそれが新鮮に感じられた。」

「また昼に会えたら」

そしてふところ思つた。

「楽しいかしら。いつも会えたら」

その思ひは次第に膨らんできていた。それは酒のせいかどうかまではわからない。彼女が今酒の中にいるのは事実である。しかし今思っていることは酒のせいではないところもあつた。

「そして側にいて」

歳の差はあまり気にならなかつた。今彼女は少女の頃の様に淡い気持ちに戻っていた。そのうえでその気持ちの中であれこれと考えていたのである。

「一緒にいて」

また考えた。

「いられたら。どんなに楽しいかしら」

自分が恋をしているのがわかつてきていた。同時にそれを抑えられなくなっていることに。

「一度」

呟く。

「勇気を出して言ってみようかしら」

告白が頭の中に漂ってきた。

「そつしたらもしかすると」

名前も知らないあの少年と何時でも一緒にいることができるかも

知れない。恋人になれるかも知れない。今までの彼女だつたらすぐに歳のことや自分の今の立場を考えて笑って止めたことだろう。だが今の彼女は違っていた。大人のラフな服で、そして酒を飲みながらその心は少女のものに戻っていた。そしてその心で思っていたのであった。

それから彼女はまだ迷った。告白すべきかしないべきか。今の自分を思つてのことではない。それが成功するかどうかを心配していたのだ。

あの少年はそれからも横を通り過ぎていった。だが彼は真砂子には気付いていない。真砂子は日が経つにつれて少年への想いを強くしていつているというのに。それはもう完全に抑えられなくなり夜その通り過ぎていく時間が来るのが待ち遠しくなってきた。

そうした日々がどれだけ続いたかわからない。カレンダーの問題ではなく真砂子の心の問題であった。彼女にとって一日はあまりにも長くなり、そして少年を見る時は一瞬になってしまっていた。もう我慢できなくなってきた。

「今日こそは」
これ以上は耐えられなくなってきた。ある朝真砂子は意を決した。彼に言うことに決めたのである。

この日はいつもと全く違っていた。ランニングも足のノリがよかった。そして化粧も念入りにした。いつもよりも妖しいものにしていった。

服も。一張羅を出した。イタリアの特注である。スカートもいつもより短めで横にスリットが入っている。ストッキングはガーターにし、下着もシルクのものにした。普段とは全く違っていた。

「これなら」
いけると思つた。女としての魅力でも、と。そして会社に向かった。だが心は仕事にはもう向けられていなかった。

「また今日はえらく派手じゃない」
丈は真砂子の姿を認めてこう言った。

「何かあるのかい？」

「さて、どうかしら」

物腰は普段と変わらない。軽く彼をあしらう。

「それは御想像にお任せするわ」

「生憎僕は想像力がなくてね」

丈はその言葉に対して笑って返す。

「何なのかはわからないね」

「そうなの」

「まあ何かあったら教えて欲しいけれどね」

そしてこう述べる。

「それでいいかな」

「気が向いたらね」

「楽しみにしているよ。おや」

ここで窓の方を見て声をあげた。

「雨が」

「梅雨も終わったのにね」

「夕立にはまだ早いけれどね」

壁にかけられている時計を見て言う。時計はまだ二時になったばかりであった。

「天気予報では晴れって言ったのにな」

「天気予報はあてにはならないわよ」

真砂子は笑ってこう言った。

「外れる為にあるんだから」

「それで外れたと」

「あてにならないものよ」

「やれやれ」

丈はそれを聞いて溜息を吐き出した。

「傘を用意しておくんだったね」

「何なら貸してあげましょうか？」

真砂子はそれを聞いてこう申し出てきた。

「真砂子はそれを聞いてこう申し出てきた。」

「いいの？」

「ええ。こんな時に備えていつも一本余分に置いてあるから」
そう言つて机の端にかけている傘を一本取り出してきた。黒い地味な傘であつた。

「これでよかつたら」

「有り難う、それじゃあ使わせてもらつよ」

丈はそれを受け取つて言った。

「御礼はビール一本で」

「えらく奮発するわね」

「感謝の気持ちさ」

そんな話をして午後の仕事の時間を過ごした。雨は降り続けていた。そして結局仕事があけても雨はあけはしなかつた。まだ降り続いていてた。

「よく降るね、本当に」

「夏にしてはね」

丈と真砂子は会社の出口で上を見上げながらこう話していた。

「降るわね、本当に」

「雨の神様を何処かの色男が泣かしたのかな」

「それは貴方だったりしてね」

「さて、それはどうかね」

彼は真砂子の言葉に対して肩をすくめて言葉を返した。

「僕は女神に知り合はいないけれど」

「この前作つたんじゃないの？バーか何処かで」

「心当たりはないよ」

「男つてのは知らないうちに女を泣かせるものなのよ」

真砂子は傘を取り出してた。

「知らないうちにね」

「男つてのは罪深い生き物だね」

「自覚すらないからね」

「というと僕もか」

「そうかもね」

傘は完全に組み立てられていた。これでもう準備は整っていた。

「貴方が気付いてないだけで」

「だから男は罪な存在か」

「そういうこと。それじゃあね」

「またそんなに急いで」

真砂子はその傘をかけて歩きはじめた。丈はその後ろ姿を見て咳いた。

「まあ頑張ってるね」

彼にはおおよそこのことは察しがついていた。女が変わるのはどういつ時か、それがわかるまでには経験を積んできていたのである。「けれどさっき自分の言ったことは覚えておいてね」

これは誰にも聞かれないように小声で呟いた。

「男つてのは自分が気付かないうちに女を泣かせる生き物だつてことは」

そう言うのと彼も傘を開いた。午後真砂子から借りた黒い傘だった。

「じゃあ僕も帰るか」

彼も会社から出た。そして一人真砂子とは反対の方向に足を進めるのであった。だが途中で足が変わった。

真砂子はそのまま歩いていった。バッグに一通の手紙を忍ばせて彼女は夜道を歩いていった。

「そろそろね」

その場所に来たところでこう呟いた。

「それじゃあ」

ゴクリ、と唾を飲み込んだ。意を決した。そして彼を待った。歩きながら待った。

「それでね」

「来たわね」

声が聞こえてきた。間違える筈もない声だった。

「あの時さあ」

「いよいよ」

真砂子は身構えた。とりあえずは平静を装って歩いていたが身構えていることに変わりはない。心の中で身構えていたのである。足音まで聞こえてきた。彼は間違いない。真砂子はそれを聞きながらタイミングを見計らっていた。

（問題はどうかやって切り出すかね）

心の中で呟いた。

（そしてそれから）

手紙を渡して切り出す。その際女もアピールする。これで自信があった。それはもうすぐであった。全てが決まるのは。

「それでどうなったの？」

（えっ！？）

その言葉を聞いて思わず動きを止めそうになった。

「結局その時は何もなしさ」

また少年の声が聞こえてきた。そこで少年はいつも通り真砂子の横を通り過ぎた。

「今でもね」

「何だ、大したことないじゃない」

だが今日はいささか事情が違っていた。少年は隣に一人の少女を置いていたのだ。彼と同じ位の歳の可愛い少女を。見れば似合いと言えた。

第四章

二人は雨の中一つの傘に入って話をしていた。傘は少年が持ち、もう片方の手は握り合っている。それだけで関係がはっきりとわかるものであった。

「それだったら」

「まあそうなるかな」

少年は笑顔で少女にそう話した。

「けれどこれからどうなるかわからないしね」

「どうなるとも思えないけれど」

「どうかなあ」

そんな何気無い話をしながら真砂子の前から消えていった。後には真砂子だけが残った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真砂子は何も言わずそれを見送っていた。少年はもう見えなくなっていた。だが彼女はそれでも少年を見ていた。

「一人相撲か」

そして一言こつ呟いた。

「私の。結局は」

それ以上は何も言う気にはなれなかった。ただ、急に力が抜けていくのがわかった。

そのまま歩き出そうとするだがここで後ろから声が聞こえてきた。

「ここにいたんだ、もっと先に行ってるかと思ったよ」

「あら」

後ろを振り向いた。すぐ後ろに丈がいた。

「間に合ったみたいだね」

「何か用なの？仕事なら明日の朝にして」

「仕事は夜にするものじゃないよ」

丈はくすりと笑ってこつ言葉を返した。

「僕達の仕事はね」
「それじゃあ何の用かしら」
「夜は何の為に過ごす時間かな」
「さて、何の為にかしら」
真砂子はまたとぼけてみせた。
「私にはわからないさ」
「僕は飲む為だと思っただけ」
そんな真砂子に対して笑ったまま言う。
「さっきのビールを。御馳走したくなってね」
「えらく早いわね」
「気の早いのが取り柄だからね。それじゃ行こうか」
「ビアガーデンは夜には不向きよ」
「ビアガーデンじゃないよ。バーさ」
彼は言った。
「近くにいい店を知ってるんだ」
「私の知ってる店じゃないみたいね」
顔を見上げて問う。
「多分ね。君はあまりバーには行かないみたいだから」
「嫌いじゃないのよ。バーも」
真砂子は言った。
「けれど。行かなかっただけ」
「どうして、また」
「溺れたくはなかったから。お酒に」
俯いてこう述べる。
「けれど。今は違うわ」
「じゃあとことんまで飲む？」
「ええ」
「わかったよ。それじゃあ行こうか」
二人は頷き合った。そして雨の夜道を歩きはじめた。
「ビールじゃないかも知れないわよ」

パープルレイン

「構わないさ」

丈は応えた。

「どのみち雨だとね。ビールは美味しくないから」

「そうね。あら」

真砂子はふと声をあげた。

「どうしたの？」

「雨が」

彼女は言う。

「紫色に」

「紫に？」

「ええ、ほら」

前を指差す。そこはもう繁華街のネオンが輝いていた。

赤い光に青い光、緑の光。その中に紫の光もあったのだ。

その紫の光を雨が反射していたのだ。そして輝いていたのである。

「紫の光が。雨の中で」

「いや、雨が紫になったんだよ」

「どういうこと、それって」

「雨に元々の色はないから」

丈は言った。

「そこに色がついたんだよ。ネオンの光でね」

「それで紫の雨になったのね」

「そうさ、夜にしか降らない雨」

彼は言う。

「ネオンの中の雨。大人の雨だね」

「大人の雨、ね」

真砂子はそれを聞いてふと何かに気付いたようであった。

「私達みたいな大人の雨ね」

「そうだね。これは子供にはわからない雨だよ」

「雨にも色々あるのなんて。今知ったわ」

「色々あるさ、雨にも」

彼は応えた。

「大人にしかわからない雨もね」

「それじゃあ私はそれがわかる大人ってことね」

「だからバーに行けるんじゃないかな」

「心はどうかわからないけれど」

「紫の雨がそれを教えてくれるかもね」

「じゃあ」

その紫の光を掲げている店の看板を見ながら言った。

「それは貴方に教えてもらおうかしら」

「喜んで」

こうして二人はそのバーに入った。後には紫の雨が降っていた。夜の街の中で。そして二人の歩いた後を濡らし続けるのであった。

パープルレイン 完

2006・2・25

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024a/>

パープルレイン

2009年4月23日02時41分発行